
楽しい部活動

山田ありか

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

楽しい部活動

【Nコード】

N8125Y

【作者名】

山田ありか

【あらすじ】

殆どギャグです多分

もっと云うなら酷いギャグです

エラーが出たので言葉を足します

一話

一度何かに嵌ると異常なまでに同じ行動を繰り返してしまう癖がある。

最近のゲームではあまり見ないが、昔のファミコンだと、不可能に近い難易度に設定されているゲームを攻略できるのは、自慢できるスキルであった。最近とあるゲームにのめり込み学校でもそればかりしている。

高校に入って独りも友達が出来なかった。欲しいとも願っていた。誰とでも仲よくなれるから、誰とも仲良くはならなかった。

薄っぺらい人間関係を維持するのにあつと云う間に飽きて、俺は常に一人だった。苛められている訳でも無視されているわけでもなく、ただそこに居るだけの人になっていた。十分満足であったが一つだけ気がかりがあった。何となく同じ空気を纏っているのを感じとったからである。

日之森鈴鹿、印象は黒髪の乙女、人間関係の距離の取り方が凄まじく薄っぺらかった。

どこまで本当か判らないが下校時に一緒に帰ろうと誘われると、必ず運悪く予定が入っていたので断っていた。注意深く観察していた訳ではないにも関わらず、何度か彼女が誘いを断っているのを耳にした、偶然にしては多すぎる。

女性に殆ど興味を持っていないのに何故気になるかと云えば、さっきからゲーム画面を覗かれているからである。

暫く我慢していたが、いい加減声でもかけてみるべきだろうか。

「……何さ」

「……何が」

「いや……なんで覗いてんだ」

「ん、いや、勉強してんのよ」

聞けば彼女も同じゲームをプレイしているらしかった。

クラスでも最近ゲームが大流行している。

大流行しているのはいわゆる『狩りゲー』と呼ばれる物の元祖で皆同じゲームをしている。

俺がプレイしているのはその元となったゲームから数多出た、同じ趣旨の、悪く言えばパクリゲームである。

良く知らない人にタイトルを云えば

「知らないけどあれのパクリだろ」と一蹴されてしまう。

しかし、自分にとってはこちらの方が面白いので仕方ない。

「気になって仕方ないんだけど……」

「あー、私貴方をホモか何かだと思っていたわ」

違和感が凄かった、彼女は明るい声色で何時も笑っていた。

それなのに、今の対応はとて冷やかでしかも失礼だ。

何か怒らせてしまったのだろうか、全く身に覚えが無い。

「人の、視線が、気になるんだよって あ」

「oh初ダメージね」

声も綺麗な彼女の鳴き声は妙に色っぽく、また発音が良かった。

「あゝあもう」

一度ダメージを喰らったので、ミッションをリタイアする。

「あれ、もう諦めちゃうの」

「仕方ないだろ、ノーアイテムノーダメージの勲章狙っているんだから」

「へえ……あのさ、放課後時間あったらさ、一緒にゲームしない？」

4

妙な提案であると感じるのは、頭が若干痛んでいるからである。すぐに頭を振って了承する。

「まあ……いいけど」

「フーフフ」

彼女は顔を見せずに、俺の机を指でなぞって席に戻った。

通常美少女に放課後二人きりで遊ぼうなどと云われたら、

狂気乱舞して今後残っている午後の授業中、うきうきしているべきであり、

すぐ、すべきであるのに、
何時も誰かと深く関わるうとしない彼女の行動が気がかりだった。
単純に同じタイトルをプレイしている人間がいないのだろうか。
普通の推理で多分答えである。俺は大人しく午後の授業を受けた。
隠す必要はない気がしつつもクラスの人間に茶化されると普通に腹
が立つので、
目配せしてから教室を出た。お互い反対方向に歩いて人気のない場
所で暫く待機。
人がハケた頃を見計らって戻ると、既に日之森が俺の机に座って居
た。

「やあや、すまんね、人とやってみたくて、これ」

ゲーム機をぷらぷら手首で弄びながら、笑っていた。

「いいよ……まあ、やりたいってんなら手伝うよ、素材とか幾らで
もあげるし……あげられない奴は手伝おうではないか」

「素材くれるんだ……いらないの、アイテム、まアーマ、まずはア
バターカード交換してよ」

ここで俺はちょっと渋ってしまった。どうせならいっそ別のキャラクターでも作っておくべきだったかもしれない。今更断るのも悪いと、渋々交換する。

「女のアバターなんだ」

「別にいいじゃん、男のケツ眺めているより可愛い女の子の方がよ
んでまあ、引くなよ」

「大丈夫、もうある程度引いてるし……まあ、私も女アバターよ男
嫌いだしね」

「いや、ミッション履歴にだよ 奇遇だな俺も女嫌いだ」

難易度は10まで設定してある、その後色々追加コンテンツも
あるのだが、

現在レベル10まで全てのミッションでノーアイテムノーダメージ
のパーフェクト称号を取っている。

「うわぁ……何もここまでやらないでも……」

何この殺害数、モンスター絶滅しちゃうよ 大丈夫私も似たよう
な感じだし」

履歴を見るとそんなにえげつなくなかった、日之森はこちらから
は確認できない部分で異常行動を取っているらしかった。

「装備をね、全種類作っているの」

「何もそこまでしなくても……」

生粋のゲーマーかもしくは少し頭のおかしい人である。

下手な人間の面倒を見ながらやるのも案外楽しいのかもしれないと、
色々考えていた自分のメニューは破綻したので、早速プレイを開始
した。

ホストは日之森と同じミッションに何度も何度も行かされ、ついに
必要数の素材を揃えた。

「おーやっとかさ出たわ、ありがとっ」

「一回電源切って乱数調整すべきだったかもな……俺凄い大量に入手したよ、つかわねーよこんなもん」

「何それまじない?」

「いや、ちゃんと意味あるの体感しているから、あながちまじないでもないと思うよ」

適当な相槌の後、

今度は最大難易度のミッションのローテーションとなったがこれが意外に面白かった。

自分より上手い人間は数多居るが

あくまでネット上でなければ会えないような場所に居る人間である。恐らくだがこの学校では俺と彼女がツートップで上手い。

そんな人間と一緒にプレイすれば、狩りゲームではなく掘削作業になる。

「あはははは、ほれほれー、楽しくなってきたわよう」

「あはは、速い速い、出現位置から一步も動いてないから画面死体で埋まって来たぞ」

「私もう殆ど何も見えて無いから勘で振ってるわよ」

凄まじい速度でタイムが更新されていく、

徐々に気心の知れる仲になってきたのか、夕日が沈みきる前には泥仕合と化していた。

「カーカカ、俺の特性弾丸を喰らえ〜」

俺は敵の攻撃を避けようとしている日之森のキャラクターにフレンドリーファイヤーをしかける。よろめいた所に必殺の大ダメージを喰らい日之森は死んでしまう。

「あ、このっ」

「ハーハハ、俺の、ダメージは一切ないが、味方を引き殺すように開発した特に意味の無い弾丸を喰らえーほれほれ吹き飛ばえい」

俺の弾丸は仲間のNPCと日之森を巻きこみ炸裂する、敵にも当たるがダメージがほぼ無いのでチクリ程度にしか効いていない。

復活した日之森が敵そっちのけで軽やかに弾をかわし、こちらに接近してくる。

「なんのっ、じゃあ思いついて実際作ってみて初めて使う、私の跳ねまわる玉を喰らいなさい」

「おい、跳ねまわっているだけで意味ねーじゃねーか」

「ファイヤー」

銃口から放たれた筈の弾丸は前に飛ばず、

日之森の背中から天使の羽が生えたように見える。つまり弾丸は背中から出た。

「すげえ、羽生えた、だからなんだよ」

「これに関してはダメージ判定さえないわよ」

お互いに味方にぶつけて迷惑をかけるしかできない弾丸を交換し合い、

そろそろお開きである。暗くなってきたので彼女を駅まで送ろうかと考え、

そもそも彼女が駅を使っているかどうかも知らないなとぼんやりしていると、

ゲーム機を締まった日之森が暗い声色で口を開いた。

「男嫌い……女嫌い……異性嫌いの人って

異性を強く意識しているからなんだよねーとか云われて腹が立った覚えがあるわ」

「ああ　それ凄いや判るわ……そうだよ、その通りだよって云いたくなるんだよね」

日之森が何か反応したように見えたが、気の所為かもしれない。

「これだって……そうよね、

パクリゲームって云われたらそうだよって大声で言ってやりたいわ」

「これ開発者が元ネタ好きだから、

元ネタのうつとしかつたとこ全部変えてストレスフリーなゲーム
つてふれこみ……

ふれこみはおかしいか、主旨か」

「昼間……覗きこんでいるのに、中々声かけてこなかったよね……
加護君つて、目の前で聞こえるように加護君の話しても無視するよ
ね、

女子がなんかそんな話してたよ」

女子にはお前も入っているじゃないかと無粋なつつこみは入れな
い。

彼女の物の言いは何か他人事のような印象を受ける。

自分は女子では無いと、女性ではあるが、クラスに数多居る女子で
はないと。

「俺に聞こえるように、俺の話をしているだけで、俺に話しかけて
いる訳じゃないだろ」

「あッ ?」

人を馬鹿にしたような、けれどとても自然に彼女は鳴いた。

多分これが日之森の本性である。知らず知らず自分も本性に近い状
態で話しかけていた。

最初、遠慮して回復剤を相手にまきちらしていた頃とは違う、ほん
の数時間前だったのに。

「俺に話しかけている訳じゃなくて、

俺の話題になつているところに自分から話しかけなければいけないとなると、

俺はあらゆる陰口を叩かれている現場にいかねばならん、って事になるだろ」

「面倒臭い人だったのね……瑞樹って」

何か喜んでいる風に見えた。

もしかしたら俺に友達が出来たのかもしれない。まともじゃない友達だ。

「すげえ……女子に名前呼び捨てにされたの初めて」

「私の事も名前で呼びなさい、当然知っていないわよね」

「いや知らない うん？ うん、知っていないわよ」

「スバルよ……」

「判ったよ……スバル」

若干照れはあったが殆ど無抵抗で口から出た。喉にひっかかったりはしなかった。

「本名は鈴鹿よ……」

「そーゆう見抜けない嘘吐くの止めて貰えませんかね」

初対面の人間に堂々と違う名前を名乗られても判らない。

「真実の名前は　メイサール・チヨネスールフ・ヴァーマンよ…

…」

「メイサ　何って？」

「メイサール・チヨネフスルス・ヴァーミリオンよ……」

「おい、聞いてた話と違うぞ」

鈴鹿は嬉しそうに笑いながら挨拶も無く教室から出た。

俺は何となく嬉しいような気分で帰路についた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8125y/>

楽しい部活動

2011年11月24日00時49分発行